

米国で橋梁の設計、研究に従事した後「日本橋」の構造設計に携わった樺島正義。  
欧州で得た西洋建築の知識を活かし「日本橋」の装飾デザインを考案した妻木頼黄。  
江戸時代、五街道の起点として、全国から多くの人や商品が集まり、日本の中心だった「日本橋」は、  
明治に入り首都東京の代表とすべく、土木技術者と建築家との共同で改築された。

# 偉人伝

the life of a great person

土木  
建築

VOL.7

建築

「一八五九年～一九一六年」

## 妻木 頼黄

Yorinaka tsumaki

日本の名を背負う  
橋にふさわしい  
デザインを考案した



妻木頼黄は1859(安政6)年、現在の東京都港区赤坂に生まれる。1878(明治11)年、工部大学校(現・東京大学)造家学科に入学するが、4年生で中退し米国のコーネル大学建築学科に留学。1885(明治18)年に帰国し、東京府と内務省臨時建築局の技師を兼務した後、西洋建築視察のため2年間渡独。帰国後は内務省、大蔵省に勤務し官庁設計を手掛けるかたわら、横浜正金銀行本店(現・神奈川県立歴史博物館)など民間の建物も設計した。

日本橋改築の際は、橋の装飾デザインを東京市から委嘱された。妻木は「日本都市に有名な橋梁として恥ずかしくない装飾を施す必要がある」と述べ、和洋折衷の様式を取り入れた。狛犬を参考にした獅子像と麒麟像を用いたり、西洋的な装飾柱の模様に一里塚を表す松や榎が見られるのはその影響である。

妻木は官民間問わず数多くの建物を設計した、明治期を代表する建築家の1人である。

土木

「一八七八年～一九四九年」

## 樺島 正義

Masayoshi kabashima

橋梁の専門家として  
「日本橋」の  
構造を設計した



樺島正義は1878(明治11)年、現在の東京都港区に生まれる。1898(明治31)年、東京帝国大学工科大学(現・東京大学)土木工学科に入学。大学卒業後、恩師である中島鋭治の紹介で渡米し、ワデル博士の下で5年間、橋梁設計の実務、研究に従事した。

1906(明治39)年、日本橋の改築のため帰国、東京市に着任する。日本橋の全体設計は、上下水道の専門家の米元晋一、河川の専門家の日下部弁二郎、建築家の妻木頼黄、樺島の4人で合議決定された。樺島は橋梁本体の構造設計を担当した。その後樺島は橋梁の専門家として約15年間で、鍛冶橋や呉服橋をはじめとした東京の代表的市街橋を次々と手掛けた。

1921(大正10)年、後進育成のため東京市を退職し、日本初の橋梁コンサルタント樺島事務所を開設。関東大震災後の復興では、復興局の橋梁事務を委嘱され貢献した。

樺島は米国での実務、研究を活かし日本の橋梁技術向上に尽力した技術者である。